

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成24年 6月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 化学研究所

職 名 教授

氏 名 時 任 宣 博

助成の種類	平成 23 年度 ・ 国際会議開催助成		
事業内容	第10回国際ヘテロ原子化学会議		
開催期間	平成 24 年 5 月 20 日 ～ 平成 24 年 5 月 25 日		
開催場所	京都大学宇治キャンパス宇治おうばくプラザ		
参加者	総数 371 名	内 訳 国外 92名 国内 279名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	事業に要した経費総額	18,864,115 円	
	うち当財団からの助成額	1,500,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)ユニカムノルタ科学技術振興財団/徳山科学技術振興財団/中部電気利用基礎研究振興財団/関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団/サントリー生命科学財団	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	要旨集印刷費	1,320,000	914,000
	海外招待講演者旅費	2,732,000	586,000
	飲食費(バンケット・昼食等)	4,150,686	
	ノベルティ費(カバン等)	1,984,000	
ツアー費(送迎バス含む)	3,310,657		
会場費	721,500		
ポスター・チラシ・ホームページ費	508,000		
事務費等	4,137,272		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 震災の影響で開催が一年延期となったことに対し、寛大な対応を頂きましたこと心より御礼申し上げます。助成額も大きく、運営における大きな助力となりました。振込等諸般の手続きに関しても迅速に対応頂き感謝しております。		

## 成果の概要／時任宣博

2012年5月20日～25日の日程で、第10回国際ヘテロ原子化学会議(ICHAC-10)が京都大学宇治キャンパス 宇治おうばくプラザを主会場として開催された。本国際会議の運営は、第10回国際ヘテロ原子化学会議組織委員会(国際委員14名、国内委員60名、名誉国内委員10名)を中心に、京都大学化学研究所、日本化学会、有機合成化学協会、近畿化学協会、ケイ素化学協会、全国共同利用・共同研究拠点「化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点」、京都大学グローバル COE「物質科学の新基盤構築と次世代育成国際拠点」の共催、ならびに International Union of Pure and Applied Chemistry (IUPAC)の協賛を得るという体制で行われた。総計で、28カ国から371名(内海外92名)の参加があった。

国際ヘテロ原子化学会議は、ヘテロ原子化学の様々な分野に関連する最新の研究成果発表と議論のための場であり、その主要テーマはヘテロ原子化合物の合成、構造および反応性(触媒を含む)、理論的検証、機能性材料への応用と多岐にわたる。今回の会議では、7件の基調講演、3件の特別記念講演(後述)、17件の招待講演、43件の一般口頭発表および154件のポスター発表が行われた。基調講演は、Wolf-Walther du Mont 教授(Technische Universität Braunschweig, ドイツ)、Vladimir Gevorgyan 教授(University of Illinois at Chicago, 米国)、Kimoon Kim 教授(Pohang University of Science and Technology, 韓国)、永瀬茂教授(分子科学研究所)、Philip P. Power 教授(University of California Davis, 米国)、Zuwei Xie 教授(The Chinese University of Hong Kong, 中国)、山本陽介教授(広島大学)によって行われた。

いずれの発表も、最新の成果をまとめた非常に重要なものばかりであり、活発に討論が行われた。また前述したテーマの一つだけに留まらず多岐にわたる分野において広範な視点から研究を進められている発表が多く、異領域融合という観点で見ても非常に有意義であったと思われる。学会の雰囲気は非常にオープンなものであり、予定された質疑応答時間以外にも、休憩時間等において招待講演者を含め多くの参加者たちの間で有意義な議論と意見交換が行なわれ、新たな研究展開の糸口を見出すと共に、お互いの懇親を大いに深めることができた。また学生発表のポスター発表に関しては、組織委員会による厳正な審査を行い、優れた9件の発表をポスター賞“ICHAC-10 Poster Award”に選出した。内上位3件を“IUPAC Poster Prize”としても表彰した。

本シンポジウムは、第1回が1987年に日本(神戸)で開催され、以来2年または3年ごとに欧州各国で開かれてきた。記念すべき第10回を迎える今回、再び日本で本国際会議を開催する運びとなったことから、通常の基調講演と招待講演に加えて、それを記念した特別なセッションを設けた(5月22日)。このセッションでは、川島隆幸教授(学習院大学)、Marian Mikołajczyk 教授(Polish Academy of Sciences, ポーランド)、Albert Padwa 教授(Emory University, 米国)の講演がなされ、各講演者はそれぞれの研究成果とともに、本シンポジウムのこれまでの総括とこれからの本シンポジウムそしてヘテロ原子化学のあり方についての指針を示して頂いた。

講演の他に、公式イベントとして歓迎レセプション(5月20日)、エクスカージョン(5月23日)、バンケット(5月24日)が行われた。エクスカージョンは、奈良、嵐山(保津川下りを含む)、東映太秦映画村、伊勢神宮の四つのコースから選択可能であり、関西圏の歴史・文化についてふれる貴重な機会となったと考えている。またシンポジウム会場にはお茶席も設けられ、参加者は日本茶を楽しむだけでなくその作法についても学ぶことができ、国外参加者だけでなく、国内参加者からも好評の声を頂いた。

また、会期中に開催したICHAC 国際組織委員会において、次回のICHAC-11をAnnie-Claude Gaumont 教授を組織委員長として2014年6月にフランス(カーン大学)にて開催することが決定された。